

第Ⅲ部第五章

尼崎の近代

第一節〈入門編〉

『尼崎市史』にみる 尼崎の近代



「御大典記念献上 尼崎市写真帖」より
中在家町の魚市場を西方より望む 大正五年頃
「明治一五・一六年波止場関係書」より
「明治一三年尼崎町村連合会決議書（部分）」

一、『尼崎市史』近代編

最初に刊行された市史近代編 昭和四五年（一九七〇）に刊行された『尼崎市史』第三巻（近代通史編）と、これに対応する史料編第七巻（一九七六）・第八巻（一九七八）は、尼崎市が公式に刊行した最初の市史近代編です。尼崎市が保管する市・町及び合併村の歴史的公文書や民間の近代文書、国立公文書館をはじめとする国の機関や大学など市外の史料保存機関が所蔵する尼崎関係の史料、新聞史料や刊行物といった基礎史料の網羅的な調査を行なったうえで、編さん刊行したものです。

これにより、それまで漠然とイメージされていた近代尼崎の歩みが、はじめて実証的に提示されました。

叙述の特徴 市史第三巻及び史料編第七巻・第八巻の執筆者は、いずれも山崎隆三氏です。

この三冊を通して山崎氏は、近代尼崎地域を全体的・網羅的にとらえる歴史叙述を試みました。その基本スタンスは、戦後日本近代史研究において蓄積された到達点や手法にしたがい、社会経済史の立場から近代尼崎地域の社会構造を分析し、これを構成する要素として政治・行政・経済などの分野を相互に関連付けながら明らかにする、というものでした。

以下、節を追って、叙述内容を解説していきます。

第一節・第二節―近代化初期― 第一節「明治維新と尼崎」では、尼崎藩の廃藩と、それにもなう財務上の後処理（旧藩の債務・藩札・藩土に支給されていた禄などの処分）、尼崎県の設置と兵庫県への統合、初期地方行政における区制の変遷、明治維新政府の財政的基

して、次の三点をあげることができます。

まず第一に、尼崎地域における工業化や産業構造の変化が、産業革命期の企業勃興から重化学工業化へという日本資本主義全体の動向の先端的な反映にほかならず、それは日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦という、一九世紀終盤から二〇世紀初頭にかけて日本資本主義が関わった戦争・戦勝と密接に結びついていたことを実証にもとづき指摘したことです。

第二に、経済構造の変化を基盤として近代町村の成立や尼崎市制施行、都市課題の発生と都市行政の変化といった地方政治・行政上のエポックがあることをとらえ、相關関係や規定性を明らかにしたことです。

この第一と第二の点は、企業・工場の進出や盛衰、あるいは行政施策の実施などを個々に表面的な事実としてとらえるのではなく、日本全体あるいはグローバルな時代状況との関連性において社会経済史的に構造を把握していくという、基本的な叙述姿勢のあらわれと評価することができます。

第三に、こういった変化が生み出した社会問題や社会運動への着目。そこには、社会の基盤としての民衆へのまなざし、ならびに近代・現代を通じてさまざまな社会問題・都市課題に直面し、それに立ち向かう多様な社会運動が活発に展開された尼崎という都市の特徴をとらえ、その歴史的理由・背景を明らかにするという執筆者の立場が反映しています。

第五節・第六節―重化学工業化から戦時体制へ―

第五節「重化学工業都市尼崎の形成」では、昭和初期の不況から満州事変以降の軍需インフレという景気変動のもと、財閥資本による築港開発、鉄鋼・火力発電など重化学工業の集積による臨海工業地帯の形

礎を築いた地租改正の実施、学制の施行による初期小学の設置状況、徴兵や交通・通信といった社会インフラの創設と整備の流れを、史料にもとづいて実証的かつ具体的に叙述しています。

続く第二節「自由民権期の尼崎」では、明治一〇年代、郡の設置や近世の町村を単位とする戸長役場の設置といった地方行政上の模索とめまぐるしい制度改変、同時期の激しい経済変動にともなう産業経済や社会構造の変化などを明らかにしています。

この二つの節による明治前半期の叙述の特徴として、次の三点をあげることができます。

まず第一に、市制・町村制に先立つこの時期が、地方制度の試行錯誤の時期であったことを分析的に明らかにしたことです。この過程において、つねに焦点のひとつとなったのが、旧来の近世町村を地方制度上どのように位置付け機能させていくのか、ということでした。そこに噴出する地域コミュニティと近代的統治支配の矛盾、近代化にともなう多大な経費負担を求められあえぐ地域の姿が、浮き彫りにされました。

第二に、この試行錯誤の時期に、兵庫県の施策が全国的にみても先進的であったことへの言及です。県令神田孝平のイニシアティブのもと、地方制度上における基礎単位としての近世町村重視を県が早期に打ち出したことや、全国にさががけての地方民会（議会）の開設など、兵庫県域、わけても尼崎を含む阪神地域の先進性を実証的に明らかにしました。

第三に、近代化にともなう経済変動、ことに明治一〇年代後半の大蔵卿松方正義によるデフレ経済政策により、都市・農村ともにきびしい不況と階級分解が進み、そのことが地主制の成立や都市におけるブル

ジョア層の形成といった、明治期から昭和戦前期にかけての地域社会構造の原型を作ったことを明らかにしたことです。そこには一面的でバラ色の近代化・経済成長礼賛とは無縁の、地域の具体像にもとづく社会構造分析という戦後近代史研究の到達点が正確に反映されていたことを、確認しておきたいと思います。

第三節・第四節―工業都市形成期― 第三節「産業革命期の尼崎」

では、明治二年（一八八九）の市制・町村制施行による近代的地方制度の確立、一定額以上の納税要件を満たす成年男子に選挙権を限定する等級選挙制による地方政治構造の形成、初期町村の財政難と民の貧窮、行政施策の方向性をめぐる政治的対立、産業革命の開始による金融業や鉄道事業・紡績業等の勃興、日清戦争戦勝後の一層の資本主義化の進展、その結果としての肥料・労賃等の上昇による農業経営の悪化、地主への土地集積による地主制の確立という、相互に関連する一連の事象を明らかにしています。

続く第四節「第一次大戦前後の尼崎」では、日露戦争・第一次世界大戦を経て財閥資本・独占資本が確立し尼崎にも進出を開始したこと、こういった経済・産業面の変化や都市化の進展による都市課題への対処の必要から大正五年（一九一六）に尼崎市制を施行したこと、資本主義化の進展が都市雑業層や労働者層の増大と貧窮、農村における一層の地主への土地集積と小作化や離農をもたらし、米騒動などの都市騒擾や労働運動・農民運動を生み出し争議が頻発していくこと、社会問題の出現や公害問題の始まりといった新たな都市課題が生まれ、これに対応する社会事業的な行政施策が要請され実施に移されていく過程を描いています。

この二つの節による工業都市形成期の叙述の特徴と



『尼崎市史』第3巻は、近代における尼崎臨海部の工業化や市域の都市化と、それに対応した市制施行の過程を実証的に明らかにしました。
写真は第3巻掲載、昭和10年頃撮影の東浜町埋め立て地と、昭和13年頃撮影の南城内・旧尼崎市庁舎。



成、公害問題の本格化、農地の市街地化・住宅地化の進展をもたらす都市計画・土地区画整理の実施、加えて道路・鉄道・学校施設拡充整備等の都市基盤整備と市村合併の推進、労働運動ならびに都市型農民運動（住宅地化にともなう土地取りあげに反対する小作争議・離作料要求）の隆盛・激化の様子を叙述しています。

第六節「戦時体制下の尼崎」では、地域組織・職場・学校など全社会的な規模での戦時体制への組織化と統制、製造業の軍需生産への集中、さらなる市村合併、動員・疎開からやがて空襲・戦災被害という、敗戦へと向かう地域の姿が描かれます。

この二つの節による昭和戦前期の叙述の特徴として、次の三点をあげることができます。

まず第一に、臨海部を中心とする尼崎の重化学工業化が、満州事変以降の十五年戦争下における軍事体制強化・軍需生産への集中と密接不可分であったことへの言及。言い換えれば、尼崎が軍需工業都市としての性格を有していたことを、明確に指摘したことです。

第二に、工業の集積に加えて大阪近郊地域の都市化・住宅地化の進展のなか、尼崎地域においても都市計画や都市基盤整備が進み、それに呼応する形で市村合併が進められた経過を明らかにしたことです。

第三に、こういった都市としての性格を反映して、この地域においては昭和初期の経済恐慌以降、左右各派が入り乱れた労働運動や無産政党運動が激烈に闘われ、尼崎は戦前期社会運動の特徴的な中心地のひとつとなったことを、実証的に明らかにしたことです。

このように、幅広い社会経済史的視点から尼崎地域の構造をとらえ、工業化・都市化・社会問題や社会運動といったさまざまな事象の相関関係を描き出すスタ

ンスは、この時代の叙述においても貫かれています。なお執筆者の山崎隆三氏は近代編への反省点として、文献史料調査の徹底を重視した一方で、時間的制約等から市民への聞き取り調査や体験の収録に十分取り組むことができず、また日中全面戦争開始以降の戦時期の記述が不十分であったとのちに述懐しています^{（1）}。

二、市史第三巻以降の尼崎近代史研究

『**地域史研究**』等に掲載された研究論考　市史第三巻刊行以降の尼崎地域近代史研究について、昭和四六年に創刊し、現在まで地域研究史料館が刊行を続ける『地域史研究』掲載の論考を中心にみていきます。

本項末尾に『地域史研究』掲載の近代史論文・史料紹介・回想の一覧を掲載しました。市史第三巻以降の成果としては、まず第一に、市史史料編に未掲載の基礎史料の翻刻掲載があります。近代初頭の社寺について祭神・宗派・堂舎や来歴といった基礎データを一覧できる第六巻第三号・第七巻第一号掲載の「明治一二年調尼崎関係神社明細帳」（同）寺院明細帳」、未刊に終わった武庫村誌の稿本のうち民俗部分を紹介する第七巻第二号・第三号掲載の松田直一「武庫村の民俗」、第一五巻第二号掲載の「尼崎市制施行関係新聞記事」、急速な人口増大など村政上の深刻な課題を抱えていた昭和戦前期武庫村の実情記録を紹介する第一一二号掲載の田中敦「昭和十一年八月武庫村行政総合視察概目答申書」などが、これにあたります。これらとはやや性格が異なりますが、第一九巻第二号く第二一卷第二号に掲載した高田伊之助「明治末尼崎町商家の青年の

三〇年余りを経て、あらためて同じ女性たちを対象に実施した聞き取り調査の成果を、第三九巻第二号に『神崎工場物語』補遺』と題して報告しています。

『地域史研究』以外に掲載された特徴的な成果としては、『在日朝鮮人史研究』誌上における阪神消費組合や朝鮮人労働運動に関する堀内稔氏の論考をはじめ、在日朝鮮人史研究の分野をあげることができます。

戦災史・戦争体験　戦災史・戦争体験もまた市史第三巻以降、大きな成果を生み出した分野のひとつです。『地域史研究』誌上では、第二巻第一号・第三号、第八巻第一号掲載の内田勝利「尼崎市の戦災資料」が、市・消防・警察など公的機関の記録を中心に、日本側の戦災史料を広く掘り起こし翻刻しました。また、第一八巻第一号く第二一卷第一号掲載の「兵庫県下の空襲に関する米軍戦術任務報告」及び、第二二巻第三号掲載の「住友金属プロペラ製造所の戦災被害」は、空襲を行なった米軍側の史料を翻訳・掲載しており、それぞれの作戦において米軍が何を意図し、どの地域や施設を目標にどのような空襲を行なったのかといった基本的な作戦データを明らかにしています。

一方、戦争体験の分野では、史料館の呼びかけに応じた八人の方の回想を掲載した第一一卷第三号「私の戦争体験」、尼崎中学校生徒の勤労働員や空襲の体験を綴る第一五巻第三号、第一六巻第一・二号掲載の岡本忍「尼中生の戦中戦後日記」、第二二巻第二号・第三号掲載の海軍飛行予科練習生（予科練生）を特攻隊員として養成する海軍航空隊の回想などがあります。また第一七巻第二号から第一九巻第三号にかけては、尼崎市内の住友金属プロペラ製造所に動員された愛媛県立松山高等女学校生徒及び、尼崎精工に動員された

日記」も、この時代の市民の日常生活を知り得るという点で、基礎的な体験記録といえます。

こういった基礎史料の翻刻掲載に加えて、市史第三巻以降、『地域史研究』をはじめとするさまざまな研究媒体において、多様な調査・研究の進展がありました。そこで次に、これらのうち特徴的なテーマ・分野の調査・研究成果をみていきます。

労働史・社会運動史・都市マイノリティ　市史第三巻以降に顕著な成果をあげ、尼崎地域史のみならず日本近代史研究に対して少なからぬ影響を及ぼした分野のひとつに、労働史・社会運動史・都市マイノリティをテーマとする調査・研究があります。

このうち『地域史研究』誌上で最初に試みられたのが、労働・農民運動の体験の記録化でした。第三巻第一号から第八巻第一号に、大正から昭和戦前期の活動家八人の方の回想を掲載しており、これらは再編集を経て『戦前尼崎の労働運動』（尼崎労働旧友会発行、一九七〇）として刊行されました。さらに、阪神地域の農民運動が戦時期に粘り強い合法要求運動を継続したことを評価する第六巻第三号掲載の岩村登志夫論文や、尼崎地域の労働運動黎明期である大正期の労働者組織化を実証的に明らかにする第一〇巻第二号掲載の小野寺逸也論文といった研究成果につながりました。

これに続いて、同誌は第一一卷第二号から第一七巻第一号にかけて、戦前尼崎の紡績工場での女性労働の体験記録を集中的に掲載しました。このうちとくに東洋紡績神崎工場で働いた新潟県出身女性たちの記録について、労働史研究者の三輪泰史氏は「近代日本の労働者の暮らしぶりや心情を示す」稀少な史料と高く評価しています^{（2）}。なお三輪氏は、一連の回想記公表から

私立松山女子商業学校生徒の日記や手紙といった、勤労働員に関する記録を紹介しました。

これらを通じて、日米双方の史料に多様な市民の体験が加わり、空襲・戦災をはじめとする戦時期の地域の様相が立体的に明らかとなりました。その成果は、空襲の作戦分析から米軍の爆撃戦略全体を論じた第二二巻第三号掲載の辻川敦論文や、市内に残る数少ない戦争遺跡である旧開明小学校機銃掃射跡の全容を史料と聞き取りから明らかにする第三五巻第一号掲載の井上眞理子論文、さらには後掲の『尼崎地域史事典』や『図説尼崎の歴史』の叙述に結実していきしました。

なお、この分野では、尼崎郷土史研究会会誌『みちしるべ』に羽問美智子氏が第二九号（二〇〇一・三）以降連載する「第二次大戦下の尼崎のくらし」が、庶民生活に視点を置いて戦時期の状況を解説しています。また、単行書として横山澄男氏ほかの編集による尼崎市民が綴る戦争体験編集委員会発行『きょうちくとの咲く街で』^{（4）}と、東園田町会発行の『戦後60年・語る、そして私は願う』^{（5）}があります。前者は市民の空襲体験に加えて、疎開・勤労働員・出征・引き揚げといった多様な戦争体験を記録しています。後者も同様に園田地区住民の多様な戦争体験を収録するとともに、旧園田村出身兵の戦没状況をも記録しています。いずれも市民自身の手で編集刊行されており、記録内容を銃後にとどめない記録となっています。

建築・都市計画　都市形成史に関わるこれらの分野は、主として一九九〇年代以降、史料館を利用する市民の調査テーマや関心、具体的には地域社会・まちづくりと地域史・地域資源の関わりという問題意識を反映する形で、大きな進展を見せました。



この記録は、本文でふれた三輪泰史氏の研究などを通して、近代労働史研究にも少なからぬ影響を与えるところになりました。（写真は田中和子氏提供、昭和一〇年代後半の神崎工場の女性労働者）

東洋紡績神崎会

大正三年に小田村今福に設置された大阪合同紡績神崎工場は、昭和六年の東洋紡績による合同紡吸収合併にともない、東洋紡の主力工場となりました。東洋紡績神崎会というのは、この神崎工場で働いた新潟県の女性を中心とする同窓会です。東洋紡は周旋人を介して特定の地方から年少の女性を雇い入れる場合が多く、新潟県の旧北・南魚沼郡も対象地域のひとつでした。

昭和四八年、東洋紡績神崎会会員の関きよさんが、東洋紡時代に寄宿係の「先生」と慕われた田中和子さんに回想記を託したことがきっかけとなり、同会の文集『神崎工場物語』計四冊（一九七六〜八三）が生まれました（うち二冊を『地域史研究』に転載。昭和五八年には会員三十数人が一泊旅行に集まり、神崎工場の跡地を訪れるという催しも行なわれます。

会を通じた人のつながりがあってはじめて、昭和戦前期に働いた女性労働者による貴重な体験記録が生まれました。同時に

これは、市史近代編を編集刊行した一九六〇～七〇年代と比較して、時代の動向が大きく変化した表れと理解することができます。市史第三巻には、文献史学の立場から都市計画についての概括的な叙述はあるものの、個別の市街地形成や都市計画事業について写真や図面を用いて視角化し、具体的に解説するという叙述スタイルはとられていません。加えて、市史第一〇巻にユニチカ記念館と阪神電鉄尼崎倉庫という明治期煉瓦建築を簡略に解説しているのを除いて、一連の『尼崎市史』には近代建築についての建築史的な解説・言及がほとんどありません。

しかしながら、地域の面的・視覚的な変化への市民の関心や、まちづくりに歴史的な地域資源を活かしたいという問題意識において、建築や都市計画の占めるウェイトは決して小さなものではありません。これを反映して一九九〇年代以降、『地域史研究』はこれらの分野に関する数々の成果を掲載しました。

まず建築分野の包括的な成果としては、鉄筋コンクリート建築が出現する市制初期の公共建築設計を担った市建築技師・末澤周次の業績を明らかにする第三〇巻第一号掲載の川島智生論文、昭和戦前期の市公共建築を記録する貴重な写真アルバムを紹介する第三四巻第二号掲載の井上衛史料紹介があります。

個別の近代建築を取りあげたものとしては、現代日本を代表する建築家のひとりである村野藤吾の若き日の作品・旧大庄村役場について、建設経緯と建築の特徴を明らかにする第三二巻第一号掲載の西村豪論文、竣工当時を知る人々の回想を紹介する同号掲載の草薙芳弘氏による聞き取り調査、村野の設計理念とデザインを建築史上に位置付けてその特徴を論じる第

三三巻第二号掲載の笠原一人論文、旧開明小学校について人々の記憶を素材に考察する第三四巻第一号掲載の伊藤昭裕論文があります。

また、現存する市内最古の鉄筋コンクリート造公共建築である旧尼崎警察署について、保存・活用を構想するシンポジウムが平成二〇年（二〇〇八）に開催されており、岡崎勝宏・笠原一人両氏の講演記録が第三九巻第一号に掲載されています。前者は主として設計者・置塩章の業績について、後者は旧尼崎警察署の建築史上の位置付けなどについて論じています。

都市計画の分野では、大正一四年の尼崎都市計画区域決定理由書などを紹介する第二二巻第一号掲載の史料紹介、市域南部・阪神国道（現国道二号）沿線における昭和初期土地区画整理事業を紹介する第二一巻第三号掲載の枝川初重論文、同じく昭和戦前期の大庄村域における土地区画整理事業を分析する第三六巻第二号掲載の森本米紀論文があります。これらの筆者のうち枝川初重氏は、尼崎都市・自治体問題研究所所報『尼崎まちづくり研究ノート』^{〔6〕}誌上においても、複数回にわたって戦前戦後の尼崎における土地区画整理史の論考を発表しています。

このほか、武庫地区の地理・地形が農業と住宅地化に及ぼした影響を考察する第二四巻第一号掲載の辻川敦・吉田かおる論文、聞き取り調査とフィールドワークを軸に地域に残る構築物の消長をたどる第三六巻第一号掲載の井上衛論文、昭和一年の園田駅設置と同時に進められた阪急電鉄の住宅地開発を紹介する第三八巻第二号掲載の松田佑論文もまた、都市形成史の分野における成果といえるでしょう。

また、後述する『図説尼崎の歴史』刊行後の研究成

人物写真を掘り起こし、刊行物に収録しました。加えて大庄と本庁の実行委員会は、編集過程で調査・収集した写真全点、それぞれ約一、七〇〇点に及ぶ写真群を史料館に寄贈し、両写真群とも市民の共有財産として保存・活用されることになりました。

こういった先行する取り組みに触発されて、二〇〇〇年代に入って以降も、園田、水堂・立花、杭瀬、道意といった旧行政村あるいは大字を単位とする地域歴史写真集や地域史の刊行が続きました。

新「尼崎市史」の聞き取り調査プロジェクト
『事典』刊行に続いて平成八年度から開始した新「尼崎市史」編集事業は、『尼崎市史』の刊行経験と活用実績、『尼崎市史』を読む会をはじめとする講座や史料館での日々のレファレンスを通じてふれる市民の関心や問題意識、それらをふまえた『地域史研究』等における調査・研究成果の蓄積を背景に、生活・文化史の重視、市民参加型の編さん手法を打ち出しました。

これを具体化する体験の記録化や聞き取り調査が主たる対象とするのは、いうまでもなく近代・現代です。そこで史料館では、新市史の準備段階から徐々に、市民参加型の聞き取り調査の組織化に着手しました。

平成七年に発生した阪神・淡路大震災前後の時期、こういった方向性を考えていたのは史料館だけではありませんでした。前項でふれた各地域の歴史写真集の取り組みに加えて、平成六年には市の外郭団体であるあまがさき未来協会の研究員・米山俊直氏の提唱のもと、まちの記憶を市民自身が記録する「ネオ・フォークロア運動」の調査・研究事業が始まり、史料館もこれに参加しました。この事業に関連して、同協会は「都市の記憶」を特集テーマとする『季刊 TOMORROW』^{〔9〕}

果として、沼尻晃伸著『村落からみた市街地形成』^{〔7〕}があります。関東在住の都市史研究者である筆者が尼崎市内にフィールドを設定し、史料調査や聞き取り調査をもとに市街地形成における人と土地・水の関係を具体的に解明した注目すべき研究です（くわしくは本章第三節〈実践編〉2、沼尻晃伸「都市化を調べる」参照）。

三、『尼崎地域史事典』から新「尼崎市史」へ

『尼崎地域史事典』の近代項目
『尼崎市史』に続いて平成八年に刊行した『尼崎地域史事典』において、近代の項目は全一、三四六項目のうち四四七項目と、時代別ではもっとも多くを占めました。これは、尼崎の地域史を理解するうえで必要かつ解説可能な項目が、他の時代と比べて近代に格段に多いことを意味しています。

『事典』の近代項目は、市史第三巻に掲載された固有名詞や事象を基本に、その後の調査・研究の成果を盛り込み、さらに採録が望ましい『事典』固有の項目について必要な調査を行ない、原稿を作成しました。第三巻の内容構成を反映して、行政関係・産業経済・社会労働といった分野の項目が多くを占めており、地域の近代史を理解するうえで基本となるもの、たとえば歴史的な公共施設三四項目、学校一五項目、企業・工場六七項目、交通機関（鉄道路線・駅・道路）一二項目、人物二一項目、労働組合・争議二九項目と、分野ごとに一定の基準を設けて対象を網羅的に収録し、簡潔な解説を行なっているのが特徴です。

地域歴史写真集刊行の取り組み
市が『事典』編集を進めていた時期、尼崎においては市民自身による特

を発行し、昭和戦前期の尼崎のダンスホールを取りあげる永井良和氏の論文^{〔10〕}をはじめとする諸論考を掲載しました。さらに、震災後の被災史料保全活動をふまえて、歴史学会に属する研究者と市民が共同で近現代史に取り組む必要性を感じた学会メンバーの呼びかけにより、尼崎戦後史聞き取り研究会という史料館の自主グループが平成八年にスタートしています。

このように、史料館はさまざまな取り組みと連携しながら各種の聞き取り調査プロジェクトを進め、その成果を『地域史研究』第二四巻第一号「特集 聞き取り・回想・体験」や同第三号「特集 新しい地域史を模索する」などに反映させていきました。こういった幅広い参加と連携の試みは、次にふれる『図説尼崎の歴史』に活かされたのみならず、前掲の『きょうちくとうの咲く街で』や、井上眞理子氏による『市報あまがさき』への連載をはじめとする一連の著作^{〔11〕}といった、貴重な成果の数々につながりました。

四、『図説尼崎の歴史』近代編

平成一九年刊行の『図説尼崎の歴史』近代編は、こういった一連の取り組み成果を反映したものとなりました。同書近代編における特徴的な内容・分野を紹介していきます。

生活史、あるいは身近で具体的なテーマ
それぞれの時代に、人々はどうのように暮らし、人生を送ったのか。身近な地域はどんな様子だったのか。多くの市民が歴史を通して知りたいと考えているのは、こういった生活史、あるいは身近で具体的なテーマです。と同時に、戦後社会経済史研究の成果を踏まえて近代尼崎

地域の社会構造を明らかにすることに重点を置き、主として文献史料をもとに政治・行政・経済などの分野を叙述した市史第三巻においては、必ずしも十分ふれられていない部分でもあります。

『図説』近代編は、こういった分野・テーマをできるだけ多く取りあげてを試みました。多くの市民が持つ「尼崎城はなぜ失われたのか」という疑問にこたえる第一節2コラム「尼崎城の廃城」、「地域史研究」掲載の高田伊之助日記や写真・引札といった視覚的な史料により明治期の庶民生活を描く第二節5「明治中後期の旧尼崎城下」、日露戦争に出征した軍医の書簡をもとに従軍記を再構成した第三節1「日露戦争」、洋画家でもあった初代市長の人物と業績を描く3コラム「洋画家 櫻井忠剛」、昭和戦前期を知る市民の記憶に残る商店街や名物を記録する6「地域の変化と人々の暮らし」、同コラム「尼いもとランプ^{あめ}飴」、都市マイノリティの生活史に焦点をあてる第四節1コラム「在日朝鮮人」といった項目が、その代表例です。いずれも市史第三巻刊行後の調査・研究の蓄積、市民による生活史や写真史料の掘り起こし、聞き取り調査の成果などをもとに叙述しています。

景観の変化と原風景
時代とともに地域の景観はどのように変化してきたのか、変化する以前の原風景はどのようなものであったのかというのも、多くの市民が関心を持つテーマです。『図説』近代編は、これにこたえる項目のいくつかを用意しました。

第三節1コラム「明治・大正期の尼崎の景観」は、近代化初期の工場写真に風景写真を織り交ぜ、それぞれの撮影位置を明治期の地図上に示しました。対照的に同節3コラム「移りゆく尼崎の原風景」は、大正か

こういった史料を活用したさまざまな調査・研究が、専門研究者に加えて市民研究者ともいうべき多様な担い手により取り組まれてきています。『図説』近代編に新たに盛り込まれた項目・分野の多くが、これらの研究成果をもにしていることは、前項までの解説を通じてご理解いただけたかと思います。

史料の種類・分野と、それを活用する調査・研究の担い手の広がり、さらには研究テーマの広がりという点では、阪神・淡路大震災後の被災史料保全活動を機に生まれた近現代史研究者と市民のネットワーク形成や史料の発掘、聞き取り調査などを軸とする共同研究の営みが、大きな役割を果たしました。

『図説』近代編の課題
次に、市史第三巻で残され、なおかつ『図説』近代編に十分盛り込むことができなかった課題を、明らかにしておきたいと思っています。

市史第三巻は、その執筆編集時点において、日本近代史研究における地域政治史や都市史研究が必ずしも十分蓄積されていない状況のもと、尼崎地域近代史の全体像をはじめて明らかにすることに取り組んだ著作でした。このため、近代初期に都市化・工業化が進み、それに対応する都市行政が進展する尼崎固有の特徴を、他の地域と比較しつつ論じることがむずかしい、という時代的な制約がありました。阪神地域や兵庫県の近代史研究そのものがいまだ少なく、こういった広域のなかに尼崎を位置付けて描き出すことも、市史第三巻以降に持ち越された課題となりました。

その後、日本近代史研究は、地域政治史や都市史の分野で大きな進展を見せました。しかしながら、『図説』近代編の都市行政や政治史に関する叙述の多くは市史第三巻に依拠しており、近代史研究の到達点を踏まえ

ら昭和初期の小西乙次氏撮影写真をもとに、当時すでに失われつつあった原風景を再現しています。このほか、第三節2「第一次世界大戦期の経済発展」をはじめとする工業化を解説する各項目においても、地図図版や各時代の工場写真をできるだけ配置し、変化の様子を視覚的に表現しました。

建築・都市計画
「一、市史第三巻以降の尼崎近代史研究」でふれたように、一九九〇年代以降、この分野の調査・研究は大きな進展を見せました。その成果が、『図説』近代編に盛り込まれています。

このうち建築をテーマとしたのが、大正後期から昭和戦前期の近代建築遺産を取りあげた第四節4コラム「尼崎の鉄筋コンクリート建築」です。また第二節4「企業勃興」や第三節3「尼崎市の誕生」といった項目にも、囲み記事の形で近代建築を紹介しています。

都市計画については、第三節6「地域の変化と人々の暮らし」、第四節4「都市化の進展と「大尼崎」」、5「新しい住宅地の形成」を掲載しました。これらの項目は、阪神国道（現国道二号）沿線、東海道線立花駅周辺、阪急電鉄神戸線沿線という三つのエリアにおいて、住民主体の土地区画整理、あるいは電鉄資本による住宅地開発という、異なる主体・手法により進められた市街地化の具休像を明らかにしています。

戦災史・戦争体験
この分野も、さきにふれたように、市史第三巻以降大きな成果を生みました。『図説』近代編は、第四節7「国民総動員の時代」、8「空襲と戦災」、同コラム「銃後・疎開・空襲」にこういった成果を取り入れ、地域の史料、市や警察・消防など公的機関の史料、米軍史料、体験記録や聞き取り調査などをもとに、尼崎市民の戦争体験や戦災被害を具体

て他都市と比較しつつ都市構造を分析し、尼崎の特質を十分に論じているとは必ずしもいえません。

その背景には、『図説』の編さんを支えた枠組みが、主として市民参加・市民研究者の広がりに依拠していたという事情がありました。そういった多様な担い手が関心を持つ、身近な地域の具体的な変化については叙述内容が大きく広がったものの、歴史学の研究蓄積を踏まえて尼崎地域の近代史研究を掘り下げるという点では取り組みが弱く、この分野の研究の組織化や意識的追求が不十分であったことは否めません。その結果、都市尼崎に関する『図説』近代編の叙述は、たとえば都市形成における建築や都市計画を具体的に明らかにする一方で、その背後にある政治構造や行政機構の分析は必ずしも十分ではなく、多くの部分で市史第三巻の叙述を援用する範囲にとどまっています。

『図説』の書評を執筆した高岡裕之氏は、上巻・前近代の叙述と比較して下巻は広域的視点が弱く、現地域にとられすぎた内容となっているのではないかと指摘しています。この点では、尼崎地域を位置付けるべき広域の近代史研究、阪神地域や兵庫県を対象とする政治・経済・行政などの基礎的研究そのものが弱く、十分に取り組まれていないという事情があります。尼崎地域近代史研究上の課題であるとともに、阪神地域や兵庫県域といった広域にフィールドを設定する組織的な近代史研究を、歴史学の分野において位置付けていくことが求められているといえるでしょう。

以上の論点とは別に、同じ書評で高岡氏は『図説』近代編・現代編に共通する課題として、産業史・労働史・行政史という旧態依然とした働く男性目線の内容編成を批判しています。生活史テーマをある程度盛り

的に記述しました。

ただし、これらの記述は基本的に銃後に関するもので、尼崎地域出身兵の従軍体験、どの部隊に召集され、あるいは志願しどこに出征したのかや、戦没・帰還・抑留といった体験についてはふれることができませんでした。自治体史において見過ごされがちなテーマであり、今後に残された課題のひとつといえます。

五、評価と課題

以上、市史第二巻から『図説』近代編に至る一連の編集事業の流れと、その前後における近代史研究について紹介してきました。これらをふまえて、最後に、市史第三巻以来の尼崎地域近代史研究を総括し、その到達点の評価と課題をまとめてみたいと思います。¹²⁾

『尼崎市史』第三巻
尼崎地域の近代史は、市史第三巻により、はじめてその全体像が実証的に提示されました。その叙述内容は、筆者・山崎隆三氏の問題意識や当時の日本近代史の研究動向などを反映して、政治・経済、社会構造の歴史的分析が中心となり、市民の体験の記録化や生活・文化史の分野が相対的に弱く、また日中全面戦争以降の戦時期の叙述がやや不十分であるという反省点の残るものとなりました。

市史第三巻後の調査・研究の広がり
市史第三巻刊行ののち、昭和五〇年に市史編修室を発展させる形で市立地域研究史料館が設置され、市の歴史的公文書や民間の近現代文書類、さらには刊行物や写真・地図などといった、編集事業のなかで集められた多様な近代史料が保存・公開されることになりました。史料館開館後も史料の調査・収集・整理・公開は継続しており、

込んでいるとはいえ、構成全体に日々の生活の視点が貫かれているとはいえないのではないかとという指摘です。この点も、今後の調査・研究や編集事業において、大きく留意すべきことがらといえるでしょう。

おわりに

以上、五項にわたって、『尼崎市史』に始まる尼崎地域近代史の調査・研究、編さん・刊行の流れを解説してきました。それぞれの時期の編集事業や調査・研究が、戦後日本近代史研究の成果に学びつつ、時代性を反映した市民の関心や問題意識を踏まえて取り組まれたこと、従前の成果を深め広げるべく、それぞれの時期・主体でなければなし得ない取り組みとして進められた一方で、成果・到達点とともに課題をとまなうものであったことを、ご理解いただければと思います。

言い換えれば、この節で紹介した多様な著作・成果の多くは相互に関連性があり、補い合う関係にあります。その全体に学び、有効に活用していくことによってはじめて、尼崎地域近代史研究をより豊かなものとしていくことが、可能になると考えています。

〔注〕

（一）パネルディスカッション「今、求められる地域史、自治体史とは」（『地域史研究』第二六巻第二号、一九九七・二）における山崎隆三氏の発言より

（二）三輪泰史『日本労働運動史序説』（校倉書房、二〇〇五）二六〇頁

（三）堀内稔「阪神消費組合について―一九三〇年代―」兵庫県における朝鮮人労働運動―兵庫県朝鮮労働組合を中心に―「兵庫県における朝鮮人労働運動と全協」戦

- 前尼崎の朝鮮人融和団体・内鮮同愛会について」（在日朝鮮人運動史研究会『在日朝鮮人史研究』第七・一九・二二・二九号、一九八〇・二二、一九八九・二〇、一九九二・九、一九九九・一〇）
- （4）『きょうちくとうの咲く街で―尼崎市民が綴る戦争体験の記録』（尼崎市民が綴る戦争体験編集委員会、一九九五）
- （5）『戦後60年・語る、そして私は願う』（東園田町会、二〇〇五）
- （6）『尼崎まちづくり研究ノート』No.1〜4（尼崎都市・自治体問題研究所、一九九九・一一〜二〇〇三・一）
- （7）沼尻晃伸『村落からみた市街地形成―人と土地・水の関係史　尼崎一九二五―七三年』（日本経済評論社、二〇一五）
- （8）この事業の成果は、財団法人あまがさき未来協会編『ネオ・フォークロア入門―あまがさき発「街かど学」のすすめー』（神戸新聞総合出版センター、一九九六）として刊行された。
- （9）『季刊 TONORROW』第九卷第二号（財団法人あまがさき未来協会、一九九四・九）
- （10）永井良和「へ川向こう」のモダンズムー昭和戦前期における阪神国道のダンスホール」（注9前掲書収録）。なお同じ著者の『社交ダンスと日本人』（晶文社、一九九二）も尼崎のダンスホールに言及している。
- （11）井上眞理子『尼崎相撲ものがたり　鉄のまちの知られざる昭和』（神戸新聞総合出版センター、二〇〇三）、同著・刊行『わたしのノスタルジック尼崎』（二〇〇四）、同「聞き描きありし日のまちと暮らし」（神戸史学会『歴史と神戸』二二九号―二〇〇一・一二―二八〇号―二〇一〇・六―に連載）、同「とことこ見聞録」（『市報あまがさき』平成一八年一〇月号）

- 成三年三月号に連載）
- （12）「評価と課題」の論点の多くは、本書準備のため行なった新「尼崎市史」研究会での参加者からの指摘に依拠している。この研究会の参加者は次のとおりである（史料館員を除く）。奥村弘、河島真、島田克彦、高岡裕之。
- （13）高岡裕之の「図説尼崎の歴史」（下）近代編・現代編」（『地域史研究』第三七卷第二号、二〇〇八・三）
- （執筆者）地域研究史料館（担当　辻川敦^{つじがわ ちか}）

尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』掲載尼崎関係近代史論文・史料等一覧

- （論文）
- 昭和恐慌期における阪神地区の電燈料金値下げ運動
- 小野寺逸也　第一卷第一号
- 地主制衰退期における一小地主の植民地主への転化
- 山崎隆三　第二卷第二号
- 産業革命期における尼崎士族青年の郷土観と士族意識
- 小野寺逸也　第二卷第二号
- 明治前期における学区の変遷―とくに兵庫県川辺郡の学区について―　宮川秀一　第三卷第一号
- 明治初期政権の階級的基礎―県・郡段階における都市部議員の動向―　山崎隆三　第三卷第三号
- 明治三四年の尼崎町における職業構成
- 福田広一郎　第四卷第一号
- 明治変革期における被差別部落の動向―尼崎を中心として―　小林茂　第五卷第一号

米騒動期における尼崎市の救済対策

小野寺逸也　第五卷第一号

尼崎市の米騒動における鎮圧対策

小野寺逸也　第五卷第三号

私生子にみる明治後期の都市社会

小野寺逸也　第六卷第二号

戦時体制下の農民運動―兵庫県農民連盟の成立―

岩村登志夫　第六卷第三号

昭和恐慌下の尼崎の工業　山崎隆三　第七卷第三号

民法実施当時の尼崎の上砂慣行

熊谷開作　第九卷第二号

尼崎地方の都市・農村における土地所有の変遷―土地台帳の整理資料を中心として―　山崎隆三　第九卷第三号

尼崎地方における友愛会支部の成立と展開

小野寺逸也　第一〇卷第二号

兵庫県における陸軍管区の変遷

宮川秀一　第一一巻第一号

阪急電鉄尼崎線の敷設計画―戦前尼崎における南北交通問題の一斑―　福田広一郎　第一三巻第三号

阪神電鉄の明治・大正期における電灯・電力事業

田中龍造　第一五巻第一号

戦前の長距離モノレール計画―京阪神単軌高架鉄道について―　小野寺逸也　第一九巻第一号

第二次世界大戦における米軍の対日爆撃戦略―阪神間地域における爆撃目標設定過程の検討から―

辻川敦　第二一巻第三号

園田家庭学園のこと　大内昌子　第二三巻第三号

武庫地区の農業と住宅地化―地理・地形の影響―

辻川敦・吉田かおる　第二四巻第一号

卒業論文「国防婦人会」の聞き取り調査

寺井加奈子　第二四巻第一号

戸ノ内の一角で―沖縄の出稼ぎの歴史と浜西の住人たち―

宮城晴美　第二四巻第三号

武庫地区における農業史聞き取り調査

古本由佳　第二七巻第三号

被災史料が語る地域の近代―元尼崎藩大庄屋・岡本家文書から―　奥村弘　第二八巻第二号

尼崎の通運業―城下の飛脚仲間から尼崎陸運組合へ―

石川道子　第二八巻第三号

本門法華宗綱要事件について　田中敦　第二九巻第三号

大正期における尼崎市公共建築について―市建築技師・末澤周次の実績―　川島智生　第三〇巻第一号

園田島之内地区における農業史聞き取り調査

義根益美　第三〇巻第一号

回想の中の水辺空間―尼崎市南東部における川と人との関わり―　松井美枝　第三〇巻第二号

「杭瀬有名商店双六」―調査と解説―

小岩真実子・瓜田美雪　第三〇巻第三号

尼崎における郵便制度の創始

藤田卯三郎　第三一巻第一号

尼崎市内に残る橘水道の鉄蓋

柴田保彦　第三一巻第二号

尼崎市北部耕地整理事業について―昭和初期、別所・東難波における宅地開発―　枝川初重　第三二巻第三号

旧大庄村役場（現大庄公民館）について

西村豪　第三二巻第一号

英国企業の極東戦略と尼崎―一九一〇―一九二五年の間におけるリバー・プラザ―ズ尼崎工場―

山内昌斗　第三二巻第二号

村野藤吾の大庄村役場をめぐって―建築史の立場から―

笠原一人　第三三巻第二号

米騒動期における尼崎市の救済対策

小野寺逸也　第五卷第一号

尼崎市の米騒動における鎮圧対策

小野寺逸也　第五卷第三号

私生子にみる明治後期の都市社会

小野寺逸也　第六卷第二号

戦時体制下の農民運動―兵庫県農民連盟の成立―

岩村登志夫　第六卷第三号

昭和恐慌下の尼崎の工業　山崎隆三　第七卷第三号

民法実施当時の尼崎の上砂慣行

熊谷開作　第九卷第二号

尼崎地方の都市・農村における土地所有の変遷―土地台帳の整理資料を中心として―　山崎隆三　第九卷第三号

尼崎地方における友愛会支部の成立と展開

小野寺逸也　第一〇巻第二号

兵庫県における陸軍管区の変遷

宮川秀一　第一一巻第一号

阪急電鉄尼崎線の敷設計画―戦前尼崎における南北交通問題の一斑―　福田広一郎　第一三巻第三号

阪神電鉄の明治・大正期における電灯・電力事業

田中龍造　第一五巻第一号

戦前の長距離モノレール計画―京阪神単軌高架鉄道について―　小野寺逸也　第一九巻第一号

第二次世界大戦における米軍の対日爆撃戦略―阪神間地域における爆撃目標設定過程の検討から―

辻川敦　第二一巻第三号

園田家庭学園のこと　大内昌子　第二三巻第三号

武庫地区の農業と住宅地化―地理・地形の影響―

辻川敦・吉田かおる　第二四巻第一号

卒業論文「国防婦人会」の聞き取り調査

寺井加奈子　第二四巻第一号

大正九年度尼崎市壮丁教育調査成績

梅溪昇（解説）　第四巻第二号

兵庫県漁業慣行録　鹹水漁業之部　抄

地域研究史料館　第五巻第一号

兵庫県川辺郡尼崎町政治革略記

地域研究史料館　第五巻第二号

ダンサーの生活実情調査―戦前の尼崎における―

東郷実　第五巻第三号

明治一五年中長洲対金楽寺の葬送紛争

地域研究史料館　第六巻第一号

明治一二年調尼崎関係　神社明細帳・寺院明細帳

地域研究史料館　第六巻第三号、第七巻第一号

武庫村の民俗（一）（二）

松田直一　第七巻第二号・第三号

明治三十年九月水害記録

地域研究史料館　第八巻第二号

明治十六年巡察使榎村正直兵庫県管内「巡察記」

地域研究史料館　第一〇巻第一号

公文録　尼崎藩之部

地域研究史料館　第一三巻第二号

大洲中学校報国隊尼崎隊職員日誌

地域研究史料館　第一五巻第一号

尼崎市制施行関係新聞記事

地域研究史料館　第一五巻第二号

尼中生の戦中戦後日記　戦中の部、同（続）

岡本忍　第一五巻第三号、第一六巻第一・二号

全国農民組合兵庫県聯摂陽地区第一回大会

地域研究史料館　第一七巻第一号

工場の花たれ塩たれ―松山高女生の住友プロペラ動員日記と父母らの手紙―（一）（二）

武智君香 第一七卷第二号・第三号

工場で迎えた卒業式―松山高女生の住友プロペラ動員日記― 松原みどり 第一八卷第一号

兵庫県下の空襲に関する米軍戦術任務報告(一)～(八)

地域研究史料館 第一八卷第一号・第三号、第一九卷第一号、第二〇卷第一号・第二号、第二二卷第一号

悪しき昭和二十年―松山高女生の住友プロペラ動員日記―

山本加津子 第一八卷第二号

プロペラ工場―松山高女生の住友プロペラ神崎工場動員日記と姉への手紙― 松本栄子 第一八卷第三号

軍需工場にて―尼崎精工動員の松山女子商校生と父母らの手紙―(一)(二)

渡部藤子 第一九卷第二号・第三号

明治末尼崎町商家の青年の日記(一)～(六)

高田伊之助 第一九卷第二号・第三号、第二〇卷第一号・第三号、第二二卷第一号・第二号

大正一四年尼崎都市計画区域決定関係史料

地域研究史料館 第二二卷第一号

住友金属プロペラ製造所の戦災被害―『米国戦略爆撃調査団報告書』― 地域研究史料館 第二二卷第三号

旧大庄村芋地区森源逸氏文書

白石健二 第二三卷第一号

大正時代の尼崎・原風景・米騒動・ストライキ―中矢稔氏の「古びた一冊のノート」―

横山澄男 第二六卷第三号

ミレニアムイベント 昔と今の尼崎写真展

地域研究史料館 第三〇卷第二号

戦前期尼崎市宮繕関係写真アルバム

井上衛 第三四卷第二号

「嗚呼昭和九年九月二十一日」室戸台風被災記録 付「昭和九年九月二十一日 武庫郡大庄村大風水被害実況」ア

ルバム 田中敦 第三五卷第一号

日露戦争従軍者書簡等について

田中敦 第三八卷第二号

「阪鶴鉄道唱歌」について 田中敦 第一一〇号

昭和十一年八月「武庫村行政総合視察概目答申書」

田中敦 第一一二号

『雲漢集』 田中敦 第一一三号

桜井忠興事績関係史料 田中敦 第一一四号

〔回想〕

一九三〇年代の尼崎の農民運動―全会摂陽出張所の常任書記として― 羽原正一 第三卷第一号

阪神地方全協活動の思い出 西村好成 第五卷第三号

戦前尼崎の総同盟労働運動の思い出

山下栄二 第六卷第一号

友愛会前後 稲見常 第六卷第二号

組合同盟・全労の運動に生きて 福島玄 第七卷第一号

阪神地方の全協・全農活動に参加して

奥田末治 第七卷第二号

小田村の無産運動の思い出 伊達徳次郎 第七卷第三号

創成期の友愛会尼崎支部の思い出

阪口萬太郎 第八卷第一号

神崎工場物語、続神崎工場物語

関きよ／東洋紡績神崎会 第一一巻第二号・第三号

私の戦争体験 由良サダコ・源嶋喜美子・小林花子・羽間美智子・畑中橘治・大森繁志・北規矩哉・羽間しづ子 第一一巻第三号

戦前の繊維労働の思い出 腕野ツル・山根ミツ・幸治政雄・伊勢木アイコ・森敏子 第二二巻第二号

但馬から神崎工場へ 北添照子 第二三巻第二号

戦前の出稼ぎ紡績女子労働者として

東洋紡績神崎会 第一四巻第一・二号

戦前の東洋紡績神崎工場寄宿係として(一)(二)

田中和子 第一六巻第三号、第一七巻第一号

宝塚海軍航空隊の思い出

高砂正和・池田節子・市川川代 第二二巻第二号

尼中から予科練へ―西宮海軍航空隊の思い出―

黒田満 第二二巻第三号

父と四・一六事件 山口哲臣 第二四巻第一号

温容、追想の我が祖父―日露戦争に従軍した尼崎の医師、

米澤幸造―米澤敏男 第二八巻第一号

ある機械工場と第二次大戦

西尾雄太郎 第三一巻第三号

聞き取り調査 大庄村役場の回想 草薙芳弘・野草巖・

橋本剛一・橋本義太郎 第三三巻第一号